こだわりスポット　NATURAL

このコーナーは「NATURAL」と題して、自然を愛し、自然にこだわり、
そして自然体で活躍されている人々を紹介していきます。

石臼挽き手打そば処　いづみや

今回、ご紹介するこだわりスポットは「石臼挽き手打そば処　いづみや」です。和泉市の郊外、国道230号線「春木北」交差点の角と、とてもわかりやすい場所にあり、行列のできる蕎麦屋として知る人ぞ知る有名なお店です。

オーナーの安井雅人さんは、関西の「うどん店」で働いた経験を生かして14年前に地元であるこの場所に「うどん店」をオープンされました。当時は「うどん専門店」とか「蕎麦専門店」というようなどちらかに特科した店が少なく、関西ではやはり「うどん」の方が馴染みがあることから「うどん店」でスタートされたそうですが、オープンから5年が経過した頃に、身体の調子を崩し入院したことを契機に、ずっとやりたいと思っていた「蕎麦専門店」に方向転換されたそうです。

とはいっても、今まで「うどん屋さん」だったのにそんなに簡単にお蕎麦を作れるの?と質問したところ、「ラッキーでした。もちろん多くの情報も取り入れましたが、すばらしい人との出会いとお客様に恵まれ、同時進行で蕎麦が成長しました」と、控えめな笑顔から、お蕎麦にかける熱い想いがグイグイと伝わってきました。

午前2時から開店の11時まで、ただ「おいしい蕎麦を食べてもらいたい」一心で石臼挽き手打ち蕎麦にこだわって作られたお蕎麦は一日約150食。コシが適度に強くてノド越しがよくて、だけどちゃんと「蕎麦」の味が主張して、無条件に「おいしい〜!!」の一言に尽きます。
「のど越し」って、つるつるした食感からだと思っていましたが、石臼挽きの蕎麦粉は粒子がそろわないそうです、その凹凸が喉にあたって「のど越し」の良さを感じるのだそうです。冷たいお蕎麦も、暖かいお蕎麦も「のど越し」で食べるのがお蕎麦の醍醐味でもありますよね。

今後は、お蕎麦を通じて「喜び」や「楽しさ」「おもしろいこと」を提案していきたいと語られる安井さんは現在42歳。奥深いお蕎麦への挑戦はまだまだこれから続くのですね。安井さんの手で挽かれた「ストーリー」がどんな形になるのか楽しみです。

白いお蕎麦が脱皮させた蕎麦の実を挽いたもの
黒い蕎麦は蕎麦柄がついたまま実をひいたもの「いなかそば」です。

石臼挽き手打そば処　いづみや
〒594−1141
大阪府和泉市春木町1023−3
電話·FAX　0725−54−1146
営業時間　11:00〜15:00
※但し、お蕎麦がなくなり次第終了となります。
定休日　毎週月曜日／第二·四火曜日
駐車場有　15台

マット·モップ·清掃用具一式
レンタルします。見積り無料!
株式会社 ダイキチ
商品本部
〒597-0094　大阪府貝塚市二色南町2-11
Tel.0724-38-4500　Fax.0724-38-4455
南大阪営業所
TEL.0120-208005
FAX.0120-400894
担当窓口:松井 亮二
DAIKICHI

だれにでも守りたいものがある
だからこそ身近で手頃なセキュリティを
機械警備から総合メンテナンスまで…
〈安心と安全〉で確実な警備を提供いたします
東洋テック株式会社
〒590-0953　堺市堺区甲斐町東1丁1番17号
南大阪支社／TEL.072-221-0753

堺歴史探訪

与謝野晶子と堺のまち
〜風景·音·香〜

明治34年に、22歳で上京するまでを堺のまちで過ごした与謝野晶子。
連載二回目は、堺時代の晶子に焦点を絞ります。
晶子の短歌や自伝をたよりに、晶子が感じた明治の堺の風景·音·香を追体験してみましょう。

(1)生家からの風景

晶子の生家は、羊羹で有名な和菓子商の駿河屋です。晶子の祖父·初代鳳惣七が、大阪の駿河屋から暖簾を分けてもらい、二代宗七(=晶子の父)の代の時、堺に移り住みました。

堺のまちのほぼ中心に位置した生家からは、晶子の短歌に、

「海恋し潮の遠(とほ)鳴りかぞへては
少女となりし父母の家(『恋衣』)」

とうたわれたように、「潮の遠鳴り」が聞こえ、また、二階の物干しに上ると、沖を行く船の帆を見ることもできました。海を眺め、様々な想いを胸にいだきながら晶子は育ったのでしょう。

「物干へ帆を見にいでし七八歳の
男姿のわれをおもひぬ(『夏より秋へ』)」

▲『住吉·堺名所并豪商案内記』(明治16年刊。堺市立中央図書館蔵)

▲図中の青印■の位置に晶子の生家があった。
『堺市全図及商工業独案内』(明治24年。堺市立中央図書館蔵)

(2)まちに響く鍛冶の音

堺の伝統産業の一つ、打刃物。まちに響く鍛冶の音に晶子もまた耳をすませていました。

「住の江や和泉の街の七まちの
鍛冶の音きく菜の花の路(『常夏』)」

また、生家·駿河屋の店先で、住吉踊りの音を聞いたと思われる短歌も残されています。

「店さきに住吉をどり笛の柄を
叩く音より夏のひろがる(『青海波』)」

(3)まちに広がる菜の花の香

江戸時代から明治時代にかけて、堺(とくに遠里小野付近)では、菜種の生産が盛んでした。晶子の自伝である『私の生ひ立ち』にも、春の堺のかおりとして、菜の花の香があげられています。美しい風景やかぐわしい香の中で、晶子が育ったのがわかります。

天王様のお社※は、町から十町程離れてあるのです。堺の人の多くが春の花見をしに行く処です。其頃の和泉河内の野を一様の金色にして居る菜の花の香にひたろうとするのには好い場所です。

※晶子の文章によると、方違神社の南東約一町にあった。
(「堺の市街」、『私の生ひ立ち』)

晶子の短歌や自伝には、この他にも、大魚夜市の日の人々の様子、泉北での茸狩り、石津川の清い流れなど、多くの堺の風景·風物が描かれています。

これらの作品は、晶子という文学者の堺時代を知る上でも重要ですが、同時に、明治の堺のまちが、そこに生きた人にとってどのような空間であったかを今に生き生きと伝える資料としても、価値のあるものだと言えます。私たちのまちの歴史が、与謝野晶子という大歌人の歌と文章によって記録されている。それは、とても幸せなことではないでしょうか。

(元·堺市文化課学芸員·足立匡敏氏)